

第31講 『湿瘡(湿疹)』

: 湿瘡は常見の皮膚病で、その特徴は対称分布、損傷が多様、激烈な搔痒、(局部の)湿潤傾向、反復しやすく慢性に陥りやすい等の特徴を持つ。

【部位別の呼称】

耳	——	耳瘡
顔面	——	奶癬
陰囊部	——	腎囊風
肘・膝	——	四弯風

等

【分類】

急性	(湿熱型)
亜急性	(脾虚型)
慢性	(血虚型)

【病因病機】

* 先天不足 [前提条件]

飲食不節 (辛辣・魚肉類の過食) } 脾 → 脾失健運 → 湿熱内生 } 風湿熱邪 ^{肌膚} → 経絡阻害 ⇒ 湿疹 [急性]

外受風邪 →

湿疹 [急性] ⇒ { 湿熱邪の消退が見られるが若干余邪が残る }
 { 脾虚が更に進む } 脾虚湿恋 ⇒ 湿疹 [亜急性]

湿疹 [亜急性] → 久病傷陰血 → 血虚生燥 → 皮膚甲錯・搔痒 ⇒ 湿疹 [慢性]

【症状と処方例】

1. 湿熱 [急性]

[症状] 発症して間もない、皮膚病変部は紅潮して灼熱感がある、搔痒感は休みが無く、

滲出液がある。身熱、心煩、口渴、大便乾燥、尿短赤。舌紅苔黄、脈滑或いは数。

[処方例]

	経 絡	意 義	取 穴 部 位
陶 道	督 脈	疏表清熱 (皮膚の瘡瘍に)	第1・2胸椎棘突起間
肺 俞	膀胱経		第3・4胸椎棘突起間の外1寸5分
曲 池	大腸経	祛風清熱	肘窩横紋の外方で、上腕骨外側上顆の前取る
神 門	心 経	安神止痒	手関節前面横紋の尺側、豆状骨の上際で尺側手根屈筋腱の橈側
陰陵泉	脾 経	健脾利湿	脛骨内側顆の下、脛骨内側の骨際、陥凹部

2. 脾虚湿恋 [亜急性]

[症 状] 皮膚病変部は紅潮し搔痒感がある。搔いた部位はただれて滲出液がある、ふけ状に皮膚の乾燥した部位も見られる。 納呆、精神倦怠感、腹脹、泥状便。 舌淡胖、苔白或いは膩、脈緩弱。

[処方例]

	経 絡	意 義	取 穴 部 位
脾 俞	膀胱経	健脾利湿	第11・12胸椎棘突起間、外1寸5分
足三里	胃 経		膝を立て、外膝眼穴の下3寸
陰陵泉	脾 経	祛湿要穴	脛骨内側顆の下、脛骨内側の骨際、陥凹部
豊 隆	胃 経	祛痰要穴	外果の上8寸、条口穴から一筋外に隔てた陥凹部

3. 血虚生燥

[症 状] 慢性。病変部の皮膚色は暗く、色素沈着が見られる。激的な搔痒感、皮膚は乾燥しボロボロで厚くなっている。 納呆、腹脹。 舌淡、苔白、脈細弦。

[処方例]

	経 絡	意 義	取 穴 部 位
足三里	胃 経	補後天生血	膝を立て、外膝眼穴の下3寸
三陰交	脾 経		内果の上3寸、脛骨内側縁の骨際
大 都	脾 経	清熱利湿	足の第1中足指節関節の前、内側陥凹部
郄 門	心包経	清血止痒	大陵穴から曲沢穴に向かい上5寸

* 局部施術：局部を消毒後、三稜鍼を用い患部を軽く叩刺し、皮膚を紅潮或いは小出血させる。

【 注意事項 】

- ① 急性の場合、患部を熱湯や石鹼など刺激物で洗ってはならない。
- ② 急性・慢性を問わず患部を掻くことを避けるべきである。また辛いものや脂の強いもの、生ものを避ける。

【 その他の療法 】

棒 灸：患部に棒灸を施し紅潮したら止める。

耳 鍼：取穴－肺・神門・副腎 中等刺激で1～2時間置鍼する。

成 方：大椎、曲池、三陰交 《 備急灸法 》

曲池 施灸各二十一壮 《 鍼灸配穴 》

【資料抜粋】

施灸による湿疹の治療 16 例。(すべて各種薬物治療が無効なものを対象とした)

取穴：曲池・血海（ともに両側）を主穴；肩髃・環跳・合谷（ともに両側）・百会・大椎。

毎日 1～2 回施灸、或いは掻痒患部に施灸。

療効：16 例中 2 例に一度鍼を施した以外は全て灸法のみを用いた。

全ての例で速やかな治癒がみられた。平均の施灸時間は 5 日間。

《鍼灸臨床経験摘要》

生薬塗り薬（アトピー性皮膚炎）

【材料】 苦 参：15g
黄 柏：9g
白 矾：15g
(ミョウバン)

【制 法】 水 500cc の中に上記の生薬を入れ、沸騰させた後冷ます。

【用 法】 シャワーや入浴前に患部に塗り、20 分ほどしたら洗い流す。

【効 能】 清熱燥湿、止痒

* 1 週間ほど試してみても効果が出ないときは、薬と証があっていないので使用を中止する。

痒み対策

粗悪艾で底面直径 15mm×20mm 程度の艾炷を作り、痒みのある患部にのせ点火する。熱くて我慢できなくなる手前で素早くつまんで取り除く。

？ ？ ？

湿疹患者の体を触ってみるとほぼ例外なく体(筋)が凝っている、こっている筋を揉みほぐせば行気活血利湿の効果が得られ症状が緩和するのではないか？